

山岳観光地における団体客の観光利用の実態

○下嶋 聖（東京農業大学大学院農学研究科） 麻生 恵（東京農業大学地域環境科学部）

1. はじめに

自然公園における利用者の増加と多様化は、自然生態系および景観の保全だけでなく自然体験の質の保全を考える上でも問題となっている。現在、自然公園においてツアーによる団体客の過剰利用が指摘されている。その解決策として利用者のコントロールが挙げられるが、単に利用者の総数をコントロールするだけでなく、グループ（団体客）の規模（グループごとの人数）をコントロールする必要がある。

研究対象地とする尾瀬、富士山、上高地の3地域は、日本で有数の山岳観光地である。また、常に利用の高い国立公園である。そこでは利用者の属性に観光客と登山客が混在利用し、シーズンの休日になると大変な混雑になる。

特に尾瀬地域内の尾瀬ヶ原においては、花期や紅葉期の日といった特定日に利用が集中する傾向にある。また、団体ツアーによるグループ利用が、見通しのよい湿原の中に敷かれた木道上を数珠繋ぎになって歩行するという状況が見られる。見通しのよい湿原の中では利用者の姿も景観の一部となり、その数がある一定数を越えると混雑感を感じるようになり、結果として自然体験の質が低下する。また景観内の利用者の数が同じでも、近くに存在する場合と遠くに存在する場合では混雑感評価が異なる。既往研究により、利用状況の違いによる混雑感評価の特性は把握されつつある^{1) 2)}。

しかし、その利用者の多くは団体客（グループ利用）といわれているが、その実態は明らかにされていない。

既往研究をみると、1973年に江山らが上高地、尾瀬と都市公園においてのグループの規模調査を行っている³⁾。しかし、現在のグループ利用の実態を把握し、3地域の比較を行った研究はほとんど見受けられない。

本稿では、山岳観光地における団体客の観光利用についての実態を明らかにし、グループ利用をコントロールする手法の検討を行うための基礎的なデータを得ることを目的とする。

2. 調査方法

グループの規模を把握するため、各地域の現地において通過する利用者を観察するポイントを設け、通過したグループそれぞれの人数（グループ規模）をカウントした。尾瀬、富士山、上高地の3地区において実施した調査内容は表-1のとおりである。

調査を実施する日時について、以下の点を考慮した。尾瀬においては、シーズン中最も利用者が多いとされているミズバショウの開花期である6月上旬に行った。富士山においては、山梨県富士スバルラインの全線マイカー規制開始日の前日に、マイカー利用客の利用が集中すると考えられるため、その翌日である8月7日に実施した。上高地においてはお盆のシーズンの土日を選んだ。

得られたデータを基にグループの規模を把握した。

表-1 調査内容

対象地	調査実施場所	調査日	実施時間	利用者 カウント方法	備考
尾瀬	群馬県利根郡 片品村鳩待峠	2004年6月5日(土)	4:30～15:00	ビデオ撮影	5日は、戸倉-鳩待峠間規制強化日 (マイカー規制のほかに路線バスを除いた 観光バスも規制)
		6月6日(日)	5:30～11:30	ビデオ撮影	
富士山	山梨県富士吉田市 富士吉田五合目登山口	2004年8月7日(土)	0:00～24:00	目視	7日0:00～22日24:00まで、富士スバルライ ン全線マイカー規制実施
上高地	長野県南安曇郡 安曇村上高地梓川左岸河 童橋～バスターミナル間	2004年8月14日(土)	6:00～19:00	目視	県道上高地公園全線通年マイカー規制の ほかに、7月24日～8月22日の期間に路線 バスを除いた観光バス等の通行規制
		8月15日(日)	6:00～19:00		

3. 山岳観光地における団体客の観光利用の実態

尾瀬、富士山、上高地の3地区において実施した調査の結果を表-2に示した。単純にグループ規模が多い順をあげると、いずれの対象地においても2人グループが最も多く、1人、3人グループ、4人グループが上位4位以内に入る。したがって1人から4人のグループの利用形態が多いことがいえる。一方、10～19人グループ、20人以上のグループについてみると尾瀬、富士山においてその件数は比較的多い。上高地は10人以上の団体については相対的に少なかった。グループ当たりの人数についてみると、富士山、尾瀬において、20人以上のグループの人数が最も多かった。

つぎに、総利用者数に対して団体利用客数の占める割合をみるため、総グループに対する各グループの割合と総人数に対する各グループの人数割合を算出し、表-3に示した。さらに、3つの対象地の総人数に対する各グループの人数割合を比較する図を作成した(図-1)これらを見ると尾瀬、富士山においては、20人以上のグループが40%前後を占める。

したがって、富士山、尾瀬において、20人以上のグループは件数としては少なくないものの、グループ当たりの人数でみると、その割合が一番大きく、総利用者数のうち約40%が団体利用客であることが言える。さらに10人以上19人以下のグループの総人数に対する各グループの人数割合も加えると、総利用者数のうち約50%が団体利用客である。

したがって、尾瀬、富士山においての団体客の観光利用についての実態は、総利用者数のうち10人以上のグループが約50%を占めていることがわかった。一方上高地においては、総利用者数のうち2人グループが約40%を占めており、10人以上のグループは約3%程度の利用しかなかった。以上の結果より山岳観光地における団体客の観光利用についての実態を把握することができた。

調査結果を通して、グループ(団体客)利用のタイプは、次の3つに分けられることができた。①従来のツアー参加の団体客：利用者が旅行会社で企画されたツアーに参加し目的地までの移動と目的地内の行動もツアーに組み込まれているタイプである。グループの規模は十数人以上になり大規模となる。②自由形ツアー参加の団体客：利用者が旅行会社で企画されたツアーに参加し、目的地までの移動はツアーに組み込まれているが、目的地内では自由に行動ができるタイプである。近年このタイプが増加傾向にあると思われる。ツアーの参加人数は①のタイプと変わらないが、目的地内での移動は、1人から数人のグループとなり、ツアーで来てい

ない個人の利用客との区別はつかない。③自主計画による団体客：ツアーに参加せず、友人・知人どうしで行動するタイプ、である。尾瀬、富士山では、①の従来のツアー参加の団体客のタイプが多く、上高地では②自由形ツアー参加の団体客のタイプが比較的多い。

したがって、グループ利用のコントロールについて手法のひとつとして考えられるのは、①従来のツアー参加の団体客については、グループの規模が大きいため、小さなグループの規模に分けることが挙げられる。さらにすべてのタイプのグループについて、グループとグループとのコントロールを図るため、ガイドを義務付けさせる方法が考えられる。

表-2 グループ規模調査の結果

グループ規模(人)	尾瀬				富士山		上高地			
	6月5日		6月6日		グループ数(個)	グループ当たりの人数	8月14日		8月15日	
	グループ数(個)	グループ当たりの人数	グループ数(個)	グループ当たりの人数			グループ数(個)	グループ当たりの人数	グループ数(個)	グループ当たりの人数
1	131	131	63	63	175	175	695	695	333	333
2	378	756	233	466	403	806	2035	4070	1164	2328
3	94	282	66	198	194	582	608	1824	340	1020
4	99	396	48	192	154	616	465	1860	275	1100
5	53	265	28	140	81	405	198	990	109	545
6	25	150	29	174	53	318	83	498	54	324
7	20	140	15	105	27	189	22	154	17	119
8	19	152	13	104	25	200	15	120	17	136
9	13	117	8	72	14	126	7	63	3	27
10~19人	47	626	35	478	53	672	14	176	9	107
20人以上	44	1807	47	1636	74	2881	1	23	3	84
総計	923	4822	585	3628	1253	6970	4143	10473	2324	6123
平均グループ規模	5.2		6.2		5.6		2.5		2.6	
グループ期規模の中央値	2		2		3		2		2	
グループ規模の最小値	1		1		1		1		1	
グループ規模の最大値	96		77		93		23		39	

表-3 総グループに対する各グループの割合と総人数に対する各グループの人数割合

		グループ規模(人)										
		1人	2人	3人	4人	5人	6人	7人	8人	9人	10人~19人	20人以上
尾瀬 (6月5日)	総グループに対する各グループの比率	14.0	32.2	15.5	12.3	6.5	4.2	2.2	2.0	1.1	4.2	5.9
	総人数に対する各グループの人数比率	2.8	16.0	6.0	8.4	5.6	3.2	3.0	3.2	2.5	11.1	38.3
尾瀬 (6月6日)	総グループに対する各グループの比率	14.2	41.0	10.2	10.7	5.7	2.7	2.2	2.1	1.4	5.1	4.8
	総人数に対する各グループの人数比率	1.7	12.8	5.5	5.3	3.9	4.8	2.9	2.9	2.0	13.2	45.1
富士山 (富士吉田口)	総グループに対する各グループの比率	10.8	39.8	11.3	8.2	4.8	5.0	2.6	2.2	1.4	6.0	8.0
	総人数に対する各グループの人数比率	2.5	11.6	8.4	8.8	5.8	4.6	2.7	2.9	1.8	9.6	41.3
上高地 (8月14日)	総グループに対する各グループの比率	16.8	49.1	14.7	11.2	4.8	2.0	0.5	0.4	0.2	0.3	0.02
	総人数に対する各グループの人数比率	6.6	38.9	17.4	17.8	9.5	4.8	1.5	1.1	0.6	1.7	0.2
上高地 (8月15日)	総グループに対する各グループの比率	14.3	50.1	14.6	11.8	4.7	2.3	0.7	0.7	0.1	0.4	0.1
	総人数に対する各グループの人数比率	5.4	38.0	16.7	18.0	8.9	5.3	1.9	2.2	0.4	1.7	1.4

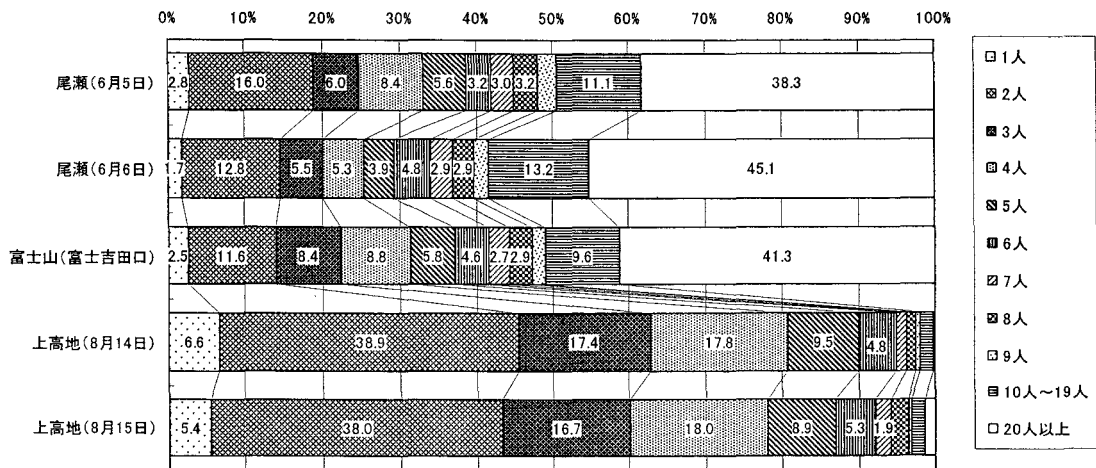


図-1 総人数に対する各グループの人数割合の比較

4. 課題

今回山岳観光地における団体客の観光利用についての実態を把握することができたが、グループ利用のコントロールについて手法の検討を行うためには、さらに国内外の事例を比較検討し、今後のグループ利用のコントロールを導入する上での課題を整理する必要がある。

参考文献

- 1) 下嶋聖・羽生田麻衣・栗田和弥・一場博幸・麻生恵 (2001)：尾瀬ヶ原における利用者の数や配置が自然景観に与える影響について：ランドスケープ研究 65 (5), 665-668
- 2) 下嶋聖・麻生恵 (2004)：尾瀬ヶ原における木道上の利用者の分布と混雑感評価の特性：ランドスケープ研究 67 (5), 685-688
- 3) 江山正美・進士五十八 (1974)：自然公園における収容力に関する研究：環境庁 (現：環境省)